

地域特性に即した女性たちの再チャレンジ支援 —首都圏郊外にくらす主婦たちの声から—

津田 好子

要 旨

子育てなどで離職した女性たちの再就職支援を含む「女性の再チャレンジ支援プラン」が発表された。出産を機に7割の女性が離職する現状で、すべての人が好んで離職しているとは限らない。地域活動を通して幾人もの女性たちの声を聞き、姿を見てきた。必ずしも「専業主婦」の現状を肯定的に捉えておらず、行き場を探しているようだった。そこで本稿では首都圏郊外の都市にくらす37人の子育て中のサラリーマン家庭の主婦たちの日々の思いをインタビューで聞き取り、「再チャレンジ支援」の視点から検討する。

夫の転勤に伴い郊外の都市に転入してきた女性たちは地縁がなく、気軽に子どもを預かってもらえる人もいない。長時間労働の夫とは会話の機会も少なく、子育てを一手に背負う。子育てや家事を自分でしたいとの思いは強く、生活は子ども中心。ボランティア活動もパートの仕事も近場を望み、子どもが帰宅するときには「お帰りなさい」と迎えたい。仕事をしなくとも納得のいく仕事地域に見つからない。育った家庭の母からの影響は大きく、本人たちの生活の実態と意識は従来の「専業主婦」そのものに見える。しかし「何か」がしたいとの思いは強い。自分の経済力のなさを不安に思いながら、年齢制限や専門性のなさと子どもが気になり、再就職に踏み切れないようだった。一方「力」のある女性たちがママ友だちのネットワークで生活を助け合い、口コミ情報で仕事を分け合っていた。

働く場が少なく、都心までは距離のある郊外都市にくらす「何か」をしたい女性たちの現状に即した再就職の支援が必要である。明確なビジョンや技術を持たなくとも、一人ひとりの思いをすくうような、地元企業の地域貢献と行政による支援とで生活状況に即した、市民主体で運営する新しい働く場の創設を提案する。

キーワード：再チャレンジ支援、地域社会、主婦、就職、郊外、企業の地域貢献、ネットワーク、起業

はじめに

ふだん私は、地元の神奈川県川崎市北部の麻生区を中心に1991年に発足した自主グループで活動している。そのグループでは市民館の講座で出会った年齢、家族構成、社会的な経験の違ういわゆる「主婦」たちが、男女共同参画の視点から自身の生活を見直し、地域の人たちとも共に学び、考えるために大小さまざまな企画や提言活動などを行ってきた。

学習会や講座の企画・運営などの実践活動を通して、多くの「あさお」にくらす女性たちに出会い、話を聞いた。夫の転勤によって幼い子どもを連れて転入し、人に出会いたくて講座に参加する人。託児付きなら何でもいい、とにかく自分の時間を持ちたかったと話す人。自分のために何かしたいが何から始めればいいのかわからない、と迷いを語る人。夫の帰宅は深夜で、夫婦の会話は無いも同然とあきらめ顔の人。子どもを立派に育てることに懸命で、その方策に関心の高い人。趣味や地域活動に生きる人。

「麻生区は川崎市のなかでも専業主婦の比率が高く、区民生活への満足度は高い」との説明をよく聞く。しかし私には限られた場とはいえ、先の講座などで出会った女性たちが自分自身の今の状況を積極的に受け入れ、満足しているとは思えなかった。それは私たちグループメンバー自身が自己を振り返ったときの実感でもあった。家族でくらすことは大切にしたい。同時に何か「主婦」「母親」以外の「私」としての時間ももちたいと葛藤する女性がいる。「仕事をする」ことへのこだわりをもち続ける女性がいる。

折しも国は、子育て等でいったん就業を中断した女性の再就業や起業などを支援する「女性の再チャレンジ支援プラン」の検討をはじめた（2005年12月発表）。

本稿ではグループ活動を通して得た実感と問題意識をもとに、大都市郊外にくらす主にサラリーマンの妻たちの声を集め、本人たちが望む「再チャレンジ支援策」を具体的に提示したい。「幸せな専業主婦」とひとくりに捉えられがちな女性たちの声を、当事者でもある私たちが聞き取り、このすでに十分語られたかに見える層の人たちの姿を「再チャレンジ」の視点から改めて丹念に見つめたい。

1. 川崎市の実情

まず既存の調査等により対象地域である神奈川県川崎市麻生区の概要と特徴を示す。

1.1 私たちのまち「かわさき」、私たちのまち「あさお」

1972年に政令指定都市となった川崎市は、川崎、幸、中原、高津、多摩の5区（分区により麻生、宮前が加わり現在は7区）でスタートした。現在の人口は約130万人、約60万世帯で、面積は約144km²。東京都と横浜市に隣接した南北に細長い地形である。

市の南部は京浜工業地帯の中核として発展し、一方中北部は多摩丘陵の緑豊かな環境と交通の利便性から東京、横浜に通う人たちの住宅地として発展した。地域によって人口や産業構造、住環境、文化的背景などの生活にかかわる諸要素にもそれぞれ違いや特色が生じている。[川崎市ホームページ]

麻生区は1982年に川崎市の行政区再編によって多摩区から分区した。川崎市の北西部に位置し、多摩丘陵の一部を占める地形的変化の多いところである。人

口は約15万人、6万2千世帯（2005年3月現在）。平均年齢40.4歳（川崎市平均39.6歳）。人口比率は0～14歳は13.8%（同13.5%）、15～64歳は71.2%（同72.7%）、65歳以上15.0%（同13.8%）（2003年10月1日現在）。川崎市全体に比べ、65歳以上人口の比率が若干高い。

1.2 川崎市民、麻生区民の生活

次に川崎市男女共同参画センターが2002年に無作為抽出の20～49歳の市民2,520人を対象に行った「川崎市生活時間実態調査報告書」から、川崎市民の生活実態を本稿の目的にかかわることを中心に抜粋する。[川崎市男女共同参画センター 2003]

女性の家事（炊事・買い物・洗濯・掃除）時間は市全体平均で一日に196分。年齢別では、年代が高くなるほど家事時間が長くなる傾向にある。子どものいる回答者を子どもの年齢別で比較すると、子どもが学校を卒業している場合を除くすべての場合の家事時間は一日250分以上。中でも中学生の子どもをもつ女性は一日平均289.3分と最も長い。子どもが学齢期になると育児に関わる時間は減少するものの、家事分野での仕事が増えている。

男性の平日の就労時間は568.3分と長い。特に30～44歳までは600分を超えている。子どもを持つ世帯の男性の就労時間はさらに長く、中学生のいる男性の平均就労時間は640分である。

女性の就労時間は子どもの年齢との関連が見られ、乳児の子どもがいる女性の就労時間が平均53.9分に対して、子どもがすでに学校を卒業している女性の就労時間は289.3分と増加する。女性が出産・子育てが一段落した後、徐々に就労し始める傾向が読み取れる。

川崎市の女性の労働力率を見ると、出産や育児のために離職するいわゆるM字型曲線の底は35～39歳の層の51.9%で、全国平均60.3%に対して底が深い。またM字の二つ目の山にあたる40歳代の労働力率も全国平均に比べて低い。

さらに生活時間に関する満足度では、子どもを持つ世帯では男性は労働時間をもっと短くしたい、子どもが小さいほど子育てにかかわる時間を増やしたいといい、一方乳児のいる女性の40%、幼児のいる女性の35%が子育て・教育の時間を減らしたいという。

女性の現在の職業は、正社員が30%、パートタイマーが17%、専業主婦が28%である。学生、無職と

合わせると34%が職業に就いていない。将来の職業に就く希望を聞いたところ、職業に就いていない女性のうちの85%ができれば職業に就きたいと考えている。

「できれば職業に就きたい」女性の内、仕事をさがしている女性は16%、条件が合えば働きたい女性は27%。就労していない女性たちがその状態にとどまりたいと考えているとは言えず、就労していない要因としては子育てや介護が大きい。

川崎市内の子どものいる女性の有職率〔川崎市2002〕は川崎市平均では第一子妊娠時（母子手帳交付時）には50.8%の人が有職であるが、出産後3ヵ月時点には17.7%に減少する。その後子ども3歳時の有職率は全市では23.9%まで回復する。

ところが麻生区では、母子手帳交付時の有職率は31.5%と川崎市内の他区より低い。子どもの年齢が3～4ヵ月時、1歳6ヵ月時での有職率は大差ないものの、3歳時での有職率は18.2%と市内で最も低くなっている。

1.3 麻生区にくらす女性たちの思いを届けたい

では実際に麻生区に住む女性たちはどのようにくらし、自身の将来にどのような望みをもっているのか。これまで出会った人から受けた個人的印象のみではなく、より多くの人から具体的な声を聞かせてもらうことが必要だと感じた。

世帯構成で核家族の割合が高く、子どものいる女性の有職率は他区に比べて低い麻生区。「麻生区は私鉄沿線での大量な住宅需要への対応というかたちで、まちづくりが進められた」「住宅地域は鉄道の駅から比較的離れた地域に島状に点在するとの特徴もある。」「通勤先や通学先は都内が中心であり、買い物等においても同様の傾向がみられます。このことは、現役世代では、都心と家との往復の生活に終始している」「このような生活様式をもつサラリーマン世帯が大部分であり、その均質化もひとつの特徴となっています。核家族化の進展が顕著で家族の形態も均質化」〔入口2003〕との指摘もある。

先にも述べたように川崎市内といえども、南北地域で大きく特徴は異なる。一口に「川崎市民」を語るより、よりきめ細かく生活者の声に耳を傾ける必要を感じ、あえてこの区内に限定して「主婦」たちの実情と意見を集約する。ここからは「大都市郊外にくらす主婦た

ち」の声として他地域との共通点も見出せるものと考ええる。

2. あさおの女性たちの生活、思い、望み — 一人ひとりのことばから

私たちはグループ活動の一環として¹⁾、インタビューにより麻生区にくらす女性たちの生活の実情を聞いた。「再チャレンジ支援」の具体策を探る本稿の目的により末子が小学生以下の子育て世代に焦点をあて、収入を伴う仕事を全くしていないか、あるいは自身の収入が103万円未満の女性たちに協力をお願いした。

2.1 調査までの流れ

- ① 既存の調査や先行研究などにより、子育て中の女性たちの現状や麻生区住民層について概略を把握。
- ② 予備調査：問題意識をより客観的に捉え直すために、麻生区にくらす子育て世代の状況をよく知るとされる2人（内1人は行政の子育て支援関連職員）、グループを組織して子育て支援を行っている2人、計4人にインタビューする。これにより、さまざまな立場の人たちの話を聞き、より幅広く具体的に子育て世代の状況を把握する。
- ③ ①と②の結果をもとに今回のインタビュー調査の骨子を決定し、調査票を作成。
- ④ 調査票に従って協力者にインタビュー。

尚、インタビューの設問はできるかぎり調査票の文言に沿うようにした。但しインタビュー中の話しの流れで、たずねる問いの順は必ずしも調査票通りではない。インタビューはグループ員の2人が担当。インタビューによるバイアスを少なくするため、情報共有を心がけ、インタビューの趣旨を確認しあう努力をした。他のグループ員は保育担当または協力者の同意が得られれば1人ずつ同行し、内容を共有した。

2.2 調査の対象

① 調査区域

川崎市麻生区内

② 調査協力者

川崎市麻生区内に居住するサラリーマン家庭の主婦
末子が未就学（グループA）または末子が小学生（グ

ループB)

本人の収入が「まったくなし」または「103万円未満」

③ 調査方法

直接面接(協力者1人にインタビュー1人) 約1時間程度

④ 協力者依頼

紹介により直接依頼。これまでに面識のない人。
紹介者には「子育てや地域、自分自身についてふだん感じていることを聞かせてほしい。準備は必要ない」旨と協力者の条件のみを伝えた。調査に対する事前の情報量に差がでないよう、また紹介者の意図が反映されないよう配慮した。(紹介は友人・知人を通して依頼、麻生市民館セミナーおよび「子育ての集い」参加者によびかけ、麻生区健康福祉センターの協力により3歳児健診時によびかけ)

⑤ 協力者数

37人(A 末子が未就学児:21人、B 末子が小学生:16人)

⑥ 調査期間

2004年11月から2005年1月まで

⑦ 面接場所

区役所会議室、市民館会議室、マンション集会室、協力者自宅

2.3 調査協力者プロフィール

① 本人(協力者)の年齢(人数合計(Aグループ人数、Bグループ人数))

20歳代:2(2, 0)、30歳代:17(12, 5)、40歳代:18(7, 11)

② 夫の年齢

20歳代:0(0, 0)、30歳代:19(17, 2)、40歳代:18(4, 14)

③ 末子の年齢

0~3歳(未就園):11(11, 0)、3(就園)~6歳:10(10, 0)

小学校低学年:13(0, 13)、小学校高学年:3(0, 3)

④ 麻生区居住年数

1年未満:3(3, 0)、1~5年未満:11(10, 1)、5~10年未満:14(5, 9)、10年以上:9(3, 6)

(注:10年以上居住のなかで、協力者自身が子どもの頃から居住:3(3, 0))

⑤ 本人の就業状況

就業中:9(1, 8)

⑥ 夫の転勤(転居を伴う)

可能性あり:12(8, 4)

⑦ 夫単身赴任中:2(0, 2)

2.4 調査の概要

協力者37人(A:(末子が未就学児)21人、B:(末子が小学生)16人)に調査票に従って、子どもとの生活、夫・家族との関係、近隣・友人との関係、協力者自身の「自分の時間」、地域活動、就業状況や自身の経済力、今後の生活展望などについてたずねた。

これらの内容を協力者たちが家族のため、地域のため、自分のためにどのように時間と労力を使っているのかを軸にまとめる。

2.4.1 子どもたちと過ごす

平日子どもたちとどの範囲に出かけるか、①家の近所 ②家から少し離れた場所 ③遠出 に分けてたずねた。

家の近所では末子が未就学の場合(A)の出かけ先は多い順に、1)公園、2)友人・知人の家、3)日常の買い物、4)市民館・図書館、5)子どものけいごと だった。友人・知人の家は、子どもをつれて出かけられるいわゆるママ友達ともいう母親たちにとっての交流の場のケースもある。末子が小学生以上(B)では、1)日常の買い物、2)子どものけいごと、3)市民館・図書館、の順である。小学生以上では子ども同士で遊びに出かけ、親は付き添う必要はなくなるため、ママ友達宅で集う機会は少なくなる。

家から少し離れた場所にはA、Bとも出かける機会は少ない。幼稚園や学校からの帰宅後では外出は時間的に難しい。学年が上がると、親とは出かけたがらないこともある。

ひとりがいくつのお出かけ先をあげるか、距離的にどの範囲に出かけるかをみると、A、Bともに個人差が大きい。子どもとどこへでも、例えば電車を乗り継ぎ片道2時間弱のディズニーランドなどの遠出でも苦にならない人もいれば、平日は公園が日常の買い物、ママ友達の家くらいしか外へ出る機会はないという人もおり、特にAでは半数近かった。

次に末子が幼稚園児、小学生の人たちに子どもが帰宅する頃何をしているかをたずねた。

幼稚園の場合、送迎バスの都合などで降園時間は定期的に変わるようだが、全員がバス停まで迎えに出る。

2人が徒歩通園を選択。幼稚園の迎えの時間と小学生の帰宅時間が重なり、上の子が鍵を持たざるを得ないことを仕方ないとしながらも、不安を語る人もいた。

小学生の場合は、ほとんどが「余程のことがない限り、家にいるようにしている」。ボランティアやパートの仕事も子どもの帰宅時間最優先で決定していた。『「ただいま」の声で子どもの一日の様子がわかるから』『「お帰り」を言ってあげたい。その方が子どもも安心するだろうから』との回答が目立った。

幼稚園の延長保育、小学生のわくわくプラザ²⁾、子どもの預け先の有無などもたずねたが「余程何かあったとき」に利用するとの声が大勢を占め、子どもの幼稚園や学校の帰宅時間にあわせて短時間、身近な範囲で行動する女性たちの姿がみえた。

乳児を含む未就園児のいる人たちに子どもの預け先があるかを聞いたところ、実家の近い人は親元をあげたが、たいていが欲しいと思いつつも預け先はなかった。多くは預けることに抵抗感を持っており、親元にも預けることで負担をかけると気遣いは大きかった。したがって、大半は何か大きな理由がない限り子どもと離れることなく一日を過ごしていた。

2.4.2 夫とすごす 家族ですごす

夫の帰宅時間は不規則なケースもあるが、大体の時間帯は次の通り。

19時まで：3 (1, 2)、19～21時：4 (2, 2)、22時まで：8 (4, 4)、23時まで：5 (2, 3)、24時まで：9 (8, 1)、24時以降：4 (2, 2)、不規則勤務：4 (2, 2) (単身赴任中のケースでは、同居時の帰宅時間)

出勤時間は朝7時前後との答えが多く、「平日夫と子どもが顔を合わせることは少ない」。

中には「この10年以上、平均睡眠時間は3時間」「不規則で帰らない日もある」。また海外を含めて長期出張を繰り返し、一年に夫が家にいる方が少ないケースも2件あった。

夫婦のコミュニケーションではふだん夫と話す時間は、「ない」が9 (6, 3)、「少し (1時間以内を目安)」が6 (4, 2)、「ある」が22 (11, 11)。「ある」人たちは夫が帰宅後夕飯の間、横に座って「一日にあったことを話す」「疲れていて聞いていないでしょうが、話す」。夫婦で話す時間を大切に思い意識的に話しかける努力をしているケースもあった。比較的夫の帰宅時間の早い家族では「ふたりでよく話す」人たちも少な

くなかった。夫から一日にあったことを話す家族も複数あった。また、「少しある」ケースでは、朝に身支度をしながらの連絡事項的な会話や携帯電話のメールを使う工夫もあった。

コミュニケーションをとる工夫として、「毎日早朝に出かける夫が妻あての「手紙」を書く。精神的なつながりになる」、「朝、夫は駅から家にモーニングコールで一言。夫のまめさに感謝」など夫の努力があがった。単身赴任中の夫が、「家族から精神的に離れるかのような危機感を持ち電話を掛けてくるようになった」と、単身赴任をきっかけにコミュニケーションの努力を始めたケースもある。

一方「ない」ケースでは、話す時間の欲しい人と、必要を感じない人とに分かれた。

妻から、話しかける努力を続けたが「もうあきらめた」と答えた人がいた。

夫婦で出かける機会については、「夫婦で出かけることがある」が18 (8, 10)、「夫婦で出かけたい」が5 (4, 1)、「夫婦だけより、子どもとも一緒がいい」が9 (6, 3)、「夫婦より、友人と出かけたい」が4 (2, 2)、「出かけたことがないから、わからない」が1 (1, 0)だった。「夫婦で出かけたい」人は、小さい子どもの預け先がなく、「出かけたい」と強く答えた。また「出かけることがある」人たちも、友人どうして工夫してそういう機会をもつ、親のすすめで実家に預けて出かける、など周囲の積極的な援助のおかげであり、機会は多くない。夫婦で出かけた体験の自己評価は高い。「出かけてみたらとても楽しくて。ふたりで話し通しだった」と明るい笑顔で話す人がいた。ふたりで観た映画のDVDを夫が買い、さらなるコミュニケーションのきっかけになったという人もいた。

夫(父親)が子育てに参加するために必要な支援では、労働時間短縮の要望は特にAからの要望が高かった。次いで家族単位での交流の希望、父親が子育ての知識を得る講座や集まりを求める声も高かった。「父親にも子育ての知識をもってもらわないと、私が何を問題にしているかが通じない」と語った人がいた。また、講座よりは「自然な集まり」が望まれた。さらに「夫一人では行かないだろうから、私も一緒に家族での交流がいい」との意見が目立った。父親の子育てへの参加希望はBでは多くなく、Aで要望が多かった。

2.4.3 自分のための時間

自分のために時間を使うことがあるのかどうか、朝の一段落する時間帯、子どもが帰るまでをどうすごすか、自分一人の時間を意識しているか、などをたずねた。

まず、朝の一段落の時間は「9時まで」が10（5，5）、「10時頃」が15（8，7）、「11時頃」が9（6，3）、11時以降が2（1，1）、「一段落はない」が1（1，0）。

Aグループのなかの末子が就園児の場合とBグループでは、子どもたちが出かけた後は物理的に「一人の時間」になる。その時間をどうすごすか、「自分の時間」を意識しているかには個人差が大きかった。自分の時間をボランティア活動や就職準備で資格を取るための勉強、スポーツの中・高齢者向けの全国大会出場を目ざしての練習など意識的に使っている人が8人いた。友人との情報交換、けいこごとなど、週に何度かの予定を入れている人たち。貴重な社会の情報源として新聞を読む、あるいは家事の合間を何となくすごすケースも少なくなかった。

子どもが小さい場合ほど、「一人の時間がとりたい」と訴えていた。それは特別なことがしたいというよりは、わずかな時間でも一人になりたい、起こされずゆっくり眠ってみたいなど、ささやかな望みを叶えたいようだった。

今回のインタビューのために1時間以上を割いていただいたが、その時間を作るのは全員が「特に大変ではなかった」。理由は「事前にわかっていた」「空いている日時で設定した」から。この「大変ではない」との回答にはこちらに対する気遣いもあると思われる。「いつもより家事を早いペースですすめる」「子どもが泣いても出かける準備をした」など子どもの小さい層で工夫があがった。中には「自分の用事で出かけるのが久しぶりで気分がよく、いつもの道なのに足取りが軽かった」と話す人がいた。

2.4.4 地域活動、自主活動

地域活動やボランティア、グループ活動などの自主活動への参加状況と関心について聞いた。P.T.A.や自治会、町内会、管理組合など輪番制のものは「役が回ってくれば参加する」。またP.T.A.活動では、子ども一人につき在学中1～2回は役員になるなど学校ごとに暗黙の了解事項があり、概して関心は高かった。学校全体の会長、副会長などの役員を複数年務める人

も何人かいた。子ども会への関心も高かった。P.T.A.や子ども会役員は「だれとやるかメンバーによって楽しさが違う」と構成メンバーを気にする声が複数聞かれた。

自主活動では、子育て支援関連のボランティアに関わり積極的に活動する人が何人もいた。中でも学校の図書ボランティアや本の読み聞かせボランティアをする人が目立った。

また子育て関連の自主グループに参加している人、これまで参加した経験のある人が10人いた。自主グループを自分から立ち上げ、運営の責任を負う経験をもつ人も複数いた。

ほとんどの人の活動は「子育て」関連であったが、「緑を守る運動」に関わる人もいた。

P.T.A.、ボランティアなどに関わる人たちからは、何か活動を始めると「時間の制約が多い」「思った以上に忙しい」との声が聞かれた。

2.4.5 働くこと、経済力

現在の就労状況は9人（1，8）が収入を伴う仕事をしていた。保育サポーターなどの不定期な仕事か、パートタイムの仕事である。

職さがしは、週末に新聞に折り込まれる地域の求人情報と友人からの口コミによる。希望勤務時間は子どもが学校から帰って来るまでの時間帯で、通勤に時間のかからない仕事場へのこだわりが強い。仕事を始めた理由に経済的理由をあげる人が5人いた。

収入を伴う仕事をしたいかをたずねたところ、Aで仕事をしていない20人中18人、Bでは8人中5人が「今後仕事をしたい」と答えた。「やりがい」「経済的理由」など理由はさまざまであり、「仕事をしたい」という思いの強さはそれぞれ違った。具体的に人に頼む、面接を受けるなどの求職活動をしているケースもあった。年齢的に就職に壁を感じ、焦りのみえる人もいた。また子どもが生まれて職を離れてから年数がたち、技術的な遅れがどんどん大きくなると不安を訴える人も複数いた。そのうちの一人は子ども2人を保育園に預けて仕事を再開しようとしたが「子どもが熱によるひきつけを起し、保育園との関係もあり仕事をあきらめざるを得なかった」。

結婚や出産をきっかけに離職したが在職中の仕事は資格の必要なものや専門性の高いものでなければ「セールスポイントにはならない」と、大半の人はか

つての経験が再就職に役にたたないという。10年以上同じ職場で働いても同様の意見が出た。また保育や介護関連の資格をすでにもっている、あるいはこれから取得したいと、これらは比較的働く時間に融通がきき、需要のある仕事と捉えられ、人気が高かった。

子どもの成長とともに「仕事時間を増やしたい」「責任ある仕事に替わっていききたい」と内なる意欲を語る人も8人いた。

仕事へのこだわりのない人の中には「以前は焦りがあったが年齢とともに吹っ切れてきて、仕事より自分のために時間を使いたい」との答えがあった。それは、かつて子ども2人を保育園に預け、働き続ける予定だったが3人目の妊娠を機にやむなく退職した人だった。他に「経済的に困らないなら、仕事より人のお役にたつことをしたい」人もいた。

自身の経済力に関しては「全くない」との答えがほとんどだった。しかしそのことへの評価は「主人に何かあったら生活が心配」な人たちと、「経済力のないことが不安、いらだちの原因になる」人たちの2つのグループに分かれる。自分名義の収入へのこだわりも「あればいい」「ほしい」と肯定的に捉える人と、「名義にこだわりはない。生活がより豊かになるように家族のために収入は増えたほうがいい」との捉え方に分かれた。

また、ふだんのお金の使い道では、自分のためのものは必要に応じて家計の中から出す人がほとんどであったが、具体的な使い道は、「美容院」「洋服」「アクセサリー」「化粧品」「書籍・雑誌」「ランチなどの交際費」「けいこごと」があがった。「たまに子どもとのファミレスでの食事」、「ちょっとおいしいものを買う」などを自分のためのお金の使い道にあげた人もいた。「高いものは買わない」「自分のためは後ろめたさを感じる」との声があった。パートで収入を得るようになり「精神的な後ろ盾を感じる」と答えた人もいた。

2.4.6 将来展望

「これまでのあなたの仕事、ボランティア、地域活動、習い事などを思い返し、これからあなたが子育てとどうバランスをとっていかうと考えるのか、再開するもの、新しく始めるものなど何かプランがありましたら漠然とでも結構です、お教えてください」と、これまでの自分の生活を振り返りながら今後の展望のあるなしを自由に話してもらった。

回答は図1のように、収入へのこだわりから、「仕事ー地域活動・ボランティア」の軸と、時間をもとに、「今すぐにー子どもの手が離れたら」の軸の2本を切り口にした4つのグループと、プランなし、漠然となにか（あるいは漠然と何でも）したい、の計6つに分類できる。

図1 将来展開のパターン

(単位:人)

		地域活動・ボランティア活動		子どもの手が離れたら
今すぐに	仕事	①	③	
		8人(4, 4)	5人(3, 2)	
	仕事	②	④	
		3人(2, 1)	8人(4, 4)	

上図以外	
⑤ 漠然と「何か」	7人(4, 3)
⑥ プランなし	4人(2, 2)
無回答	2人(2, 0)

- ① 今すぐ、地域のなかでできることから始めたい(習い事も含めて) 8人(4, 4)
- ② 今すぐ、収入を伴う仕事を始めたい 3人(2, 1)
- ③ 子どもの手が離れたら、地域活動を始めたい 5人(3, 2)
- ④ 子どもの手が離れたら、仕事を始めたい 8人(4, 4)
- ⑤ 漠然と「何か」したい。時期も内容も具体的ではない 7人(4, 3)
- ⑥ 将来のプランは考えていない 4人(2, 2)

①のグループは「今すぐ」と言っても、末子の年齢はまちまちで、乳児を育てながら自分を考える人と末子が小学生で自分のことを考え始めた人などが混在している。

②は収入を伴う仕事を志向する人たちである。幼児のいる一人は「頑張って3歳までに保育園へ入れる」目標を持っている。

③と④はどちらも「子どもの手が離れたら」の条件つきで仕事か地域活動・ボランティアを始めたい人たちである。この「子どもの手が離れる」と感じる時期は個人差が大きい。「幼稚園に入った頃から段階的に」という人がいれば、「中学に入れば」という人もいる。

また「子どもが中学生くらいまでは子どものことを中心に考えるのが自然。それ以降、夫婦二人の生活に入り、その準備をすればいい」という人もいた。

⑤漠然と何かしたい、あるいは経済活動も地域活動もしたい。経済的な自立への願いと家族での生活を大切にしたい思いとが両立できそうにない、と葛藤を話す人が2人いた。

⑥のプランはない、と答えたなかの3人は「それが問題」と、将来展望を考えていない、またはプランをもてない自分に疑問を感じていた。残りの1人は「もう一人子どもを産むことが先決」。

今子どもとの生活を第一に考える人も、自分の生活も考えたい人も、今回調査に協力いただいた方のほとんどはこの質問には少なくとも「何かをしたい」との思いをみせていた。

2.5 調査の結果から

37人の麻生区にぐらす女性に出会い、話をきいた。一人ひとりの思いを的確に受け止められたか、それらをこの場でうまく伝えられるか責任の重さを感じる。ここでは今回の結果をいくつかのテーマごとに捉え直してみたい。

2.5.1 子どもを気軽に預かってくれる場があれば

「自分が具合の悪いとき、小さい子がいるので病院にいけない」「どうしても具合が悪くて休みたいときは、和室を閉め切って子どもたちにはその部屋の中で遊ぶように言います。そして私はその部屋の中で寝ています」。自分の体調が悪くても、子どもを見てもらえる人がいない母親たちの声である。ほとんどの人は子どもを緊急時に預かってくれる場所を望んでいる。

子どもの幼稚園での友人関係や公園仲間とで、子どもたちを預かり合う信頼関係を築く人たちは少ない。「両親学級」や「ニューカップルセミナー」をきっかけにプレ・ママ時代からの付き合いが続く人もいた。この友人関係で「歯医者さんや美容院に行くとき」「きょうだいの懇談会や授業参観のとき」預かり合う。しかし多くの場合「自分の都合で預かってとは言えない」。子どもが幼稚園以上になれば「預かるというよりは、遊びにきて」という感覚で助け合えるが、「子どもが小さいと相手に負担をかけるから」と遠慮がちになる。そのため気軽に預かってくれる場所があればいいとの要望は強かった。

とはいえ、子どもを預けることへの抵抗は「自分の都合」のときほど大きくなる。「リフレッシュのため一時間でも見てもらえれば」と思う一方で「専業主婦だから、自分の都合で子どもを預けるのにお金は使えない」「ちゃらちゃら遊ぶために預けようとは思わない」。

また「何かあったときに後悔したくない」と安全面を危惧する声は多く、「ベテランの人なら安心できる」など預かる側への要求度は高かった。

一人の時間を持ちたい、預かってくれる場が欲しいという気持ちと、「自分のために子どもを預けるのにはためらう」気持ちとの間で揺れ動いていた。

その中で子どもが生後数ヵ月から自分の都合のために預けてきた人は「子どもと二人でばかりいるとお互い煮詰まってしまう。遊ぶ場に行くことは子どもも楽しいみたい」とさりと話す。経済面も視野に入れて「行政が子育て支援として子どもを預かる場を作って、子ども一人に対して月に一回は無料で預かるくらいしてくれればいいのに」という意見もあった。常設の場で親たちが自分の目で様子確かめながら無料の「お試し」ができれば、専業主婦にとっての子どもを預ける敷居の高さは変わるかもしれない。

2.5.2 ささやかな「自分の時間」

多くの人が自分の時間を欲しいと考えている。これは何か大きなことをするのではなく、一杯のコーヒーをゆっくり飲みたいというささやかな願いのこともあった。またほとんどの人は自分の時間を持つことは大切と考えていた。

具体的に「何をしているか」をたずねると「犬の散歩」「翌日のおやつの下ごしらえ」「花の手入れ」「子どもの洋服づくり」など、家事関連のことも少なくなかった。ある人は「結局家事の延長のようなことになってしまっ。好きではあるのだけれど、なにか物足りない」と話す。資格取得の準備など目標を持って自分の時間を使う人がいる反面、家事からなかなか抜け出せない女性も大勢いる。

2.5.3 子どもたちへ負担をかけたくない母親たち

インタビューから、子育ては自分の手でしたいとの思いの強さを感じた。家事については「家事の配偶者以外への依頼について、女性の場合はほとんどの家事について『自分でやりたいから』『家庭内のことは他

人に任せたくない』。『家庭内のことは自分たちで』やりたい、だから『自分でやらなくては』と考えている。[川崎市男女共同参画センター 2003]との調査結果がある。同調査では「女性の理想的な生き方は男性よりばらつきはあるものの家庭中心だった」という。

今回のインタビュー結果では、女性たちの家庭と子ども中心の生活は子どもが小学校入学後も続く。子どもが帰宅時には家にいたいとの思いはとても強いようだった。自分自身が「母が家にいるのが当たり前」の環境で育ったから」あるいは自分の母親が働いていたために「寂しかった」から、という人がいた。夫に「子どもが小さい間は家にいてあげて」と言われるから、という人もいる。

母親が夕方まで出かけると、「夕食が遅くなり子どもにも負担をかける」「暗くなっても母親が帰っていないようでは、子どもにも負担」。母親たちは子どもたちの学習塾を含むいこごとの車での送り迎えにも忙しい。「駅まで遠く、道は暗い。そこを歩かせるのは、時間ももったいないし、安全面でも心配」。

学校内での痛ましい事件や短期間に教育政策が変わることなどもあり、特に子育てを一手に引き受ける母親たちの不安感と「よい子育て」への精神的縛りは大きくなっている感がある。自身の母親が働いていて寂しかったから、自分は子どもたちのために家にいたいと話した一人が「寂しかったけれど親にあれこれ言われなくてよかったかなと、自分の子どもを見ていて思うこともあるけれど」と付け加えた一言が印象に残る。

2.5.4 「何かをしたい」

今回話を聞いたほぼ全員が仕事、ボランティア、何か家庭内以外のことをしたいと考えていた。ところが、何かを始めることと家族を大事にしたいそれぞれの生活スタイルが両立しにくい現状もみえている。長時間労働の夫が今すぐに家庭内の仕事を分担することは難しく、子どもも自分の手で育てたいとの強い思いに一步を踏み出せないでいた。

「経済活動」への望みもまた決して無視することはできない。「経済力」を夫だけに頼ることを多くの人が不安に感じていた。この不安を自身が解決する方法がないことにさらなる不安をもつ人がいた。「情けない」等自己否定的にさえ捉える人もいた。ほとんどの人が「今後」仕事はしたい。しかし子どもとの生活リズムもまた大切にしたい。この二つを並走させる方法

が見つからない葛藤があるようだった。

2.5.5 はじめの一步をふみだす

新しいことを始めるには思い切りが必要になる。特に「専業主婦」になった人たちは社会から取り残されたように感じることも多い。仕事に就くのを「社会復帰」と表現する。

パートで働き始めた一人は「友人の紹介で始めたが、はじめは私にできるのかとても不安で失敗する夢をよくみた」という。出産前は旅行会社で海外添乗もこなしてきた人の言葉である。しかし今では働き続けるうちに少しずつ自信がつき、欲が出てきたという。

また、「仕事を辞めたばかりの時は焦りがあったが、年齢とともにその気持ちは薄れた」と質、量ともに相応な仕事の経験をもつ人が話した。

今回話を聞いた人たちに、自分を育ててくれた母からの影響の大きさを感じた。ボランティア活動に積極的に関わる母を見て育ち、自分もそうしたいと考える人が複数いた。

2.5.6 それぞれの言葉から

最後に自分の将来展望と家族との生活のバランスについて、3人の事例を記す。

事例1：40歳代 夫と子ども1人（3歳、就園児）

夫は海外出張が多くほとんどいない

「最初は子どもが幼稚園に入ったら働こうと考えたけれど、入園してみるとまだいろいろあって（幼稚園の）時間も不規則。小学校に入ったらと思うけれどまたいろいろあるかもしれない。小学2～3年生になったら何か始めたい。いつも実際そうならないとわからなくて、延び延びになってしまう。もっと早くにパッと始めてしまえばよかったのかも。一人親家庭のことを思うとできるはずなのに、私に根性がないからできない」

就職準備に資格取得をめざして通信教育受講中。延長保育を利用して勉強する。「子どもから離れられないのは私の方と思う」と言う。

事例2：30歳代 夫と子ども2人（3歳、小学1年生）

元CADオペレーター

「主人はそろそろ働かないと就職先なくなるよ、と言う。経済的にも早く私に働いてほしいみたい。子どもが小さいのにそんなこと言われても困ってしまう。子どもの頃両親が働いていて寂しかった。私はもう少

し下の子が大きくなるまで家にいたい。確かにそろそろ年齢制限を気にする歳だけれど。求人広告をよく見ていて時々CADの募集がかかっていると、行きたいなと思う。離れている間に技術が変わってわからなくなっている不安はあるけれど、やりたいな」

経済的理由と夫の圧力と年齢を気にかけながら、子どものために復職を決めかねていた。

事例3：30歳代 夫と子ども1人(1歳)

「子どもを育てながら仕事をしている人が多いが、仕事を再開するタイミングや仕事をしていて生活にどういう不都合があるのかを知りたい。専業主婦になってしまうと働く人と接しないので情報が欲しい。専業主婦と働くお母さんとが交流できるスペースがあればいい。行政も専業主婦が子どもを預ける場所を作って、子ども一人につき、月に1回タダで預かるくらいしてくれればいい。タダならお試しできて、経験にもなる」

仕事への意欲が高く、再開のタイミングを具体的に体験者から聞きたいと積極的だった。

3. 麻生区の地域特性に即した「再チャレンジ支援策」

ここに「何か」を始めたい女性たちがいた。この人たちの「始めたい」気持ちを大切に、そんな都合のいいことあるはずないとあきらめさせるのではなく、明確な方向が見つからない人たちのための「再チャレンジ支援」もあればいい。

一度「働く場」から降りた女性たちには元の職場への復帰や望み通りの再就職の道はまだまだ険しい。また均等法以降の職場を知る世代の女性たちは「あの現場に戻るのは躊躇する」という。この郊外の地で、長時間労働を余儀なくされる夫と共に家族の生活も大切にしたい女性たち。しかし必ずしも今の「専業主婦」のままでいたいのではない。「何か」や仕事をしたい人が、家族状況に必要以上に縛られることなく子育て中でも始められるように、いわれのない年齢制限の壁や具体的に示せる実績のあるなしにくじけることなくそれぞれの思いが叶えられることを願う。

具体的な資格のないために「履歴書」や「職務経歴」に書き表せない力を持つ女性たちが地域の中にたくさんいる。この地域に埋もれる「人材」を活用する「再チャレンジ支援」は地域の活性化にもつながる。

主婦経験が長いほど「社会復帰」には勇気が要る。そのハードルを低くして、なんとか次の目的地に到達できないか。それぞれの生き方を肯定する支援が必要ではないだろうか。

今回のインタビューで、「ママ友達」で協力しあう強いネットワークがあった。子どもを預かり合い、生活を支え合っている。求人紙に載らない「ちょっとした仕事」を口コミで分け合っていた。出会いのきっかけは公園や幼稚園入園、妊娠中の講座のようだった。

この女性たちのネットワークをもう少し拡げ、近隣との交流のきっかけがつかめず、既存のグループに入るのは抵抗のある人たちもいつでも気軽に立ち寄れるゆるやかなネットワークの拠点が麻生区に創れないだろうか。子どもの年齢や子どもの有無に関わらず「何か」を求める女性たちが持つ力を出し合い運営する母子の居場所と託児所とさらにそこは多くの女性たちがこだわりを語った「経済力」も鑑みてジョブカフェにも似た柔軟な常設の場が創れないか。地元企業が「ちょっとした仕事」の求人ができ、女性たちも半端なすき間産業の仕事ながら「何か」ができる。またこの場の運営自体が地元での働き場の提供にもなる。「何かをしたい人たちが」自分を取り戻せる場にもなればいい。やがて目的をもち、ステップアップしたくなれば「卒業」すればいい。「何か」を求める人たちに向けたゆるやかな再チャレンジの支援である。

働く場が集中する都心までは遠い麻生区のような郊外にくらす女性たちは再就職に不利である。この不利を乗り越えるためには、地元企業を巻き込む必要がある。それには行政の後押しも不可欠である。私の知る限り、今の地域活動は動く人ほど仕事も責任も集中し、精神的にも体力的にも負担感は募る。金銭的な持ち出しの出る場合も少なくない。現状のままでは長期間活動を継続するにはさまざまな無理が生じかねない。活力ある地域特性に即した「再チャレンジ支援」のためにもっと施策としての後押しが欲しい。

市民と地元の企業と行政の支援との3つの協働で、何かを求める女性たちの思いと力を結び、生かし合う場の創設を提案したい。それは個人の情報格差に左右されないネットワークづくりのひとつでもある。

麻生区にも子育て支援や子育て中の母親たちの自主グループはたくさんある。その中で、さまざまな世代のスタッフで構成されるある会は「子育て中の親がやりたいことを企画し、それを実現できるようにサポー

トすることを原則」に積極的に活動している。この会では会員が講師になる講習会を始めた。わずかばかり「講師料」も支払われるという。

講師予定の一人は「自分のできることをみなさんに伝えることで私も達成感やよろこびが得られる。生きがいと潤いになる。今のボランティア活動は時間的にも体力的にもとてもハード。それなのに好きなことをしているだけと軽んじられて悔しい。もし少しでも家に持って帰れるものがあれば、活動を家族に理解してもらいやすくなる」と話す。

むすび

地域の自主グループとして活動してきた中で感じたものと、今回の出会いの中で感じたこととをうまく結びつけられたか不安である。

一人ひとりが語る言葉には生活から出る重みがある。一人ひとりの言葉を聴き、「よい」「悪い」や「好き」「嫌い」に択一的に分類できない微妙な心の揺れを大切にしたい。現状に満足しているかの問いに「はい」と答えたとしても、「はい」の濃度はそれぞれ違う。心から満足している人がいれば、現状はこんなものだろうからと消極的な「はい」の人もいだろう。他の選択肢を知らないゆえの現状肯定もあるかもしれない。「はい」の後ろに見え隠れする本当は感じていた社会に対するちょっとした疑問や怒りに耳を傾けて欲しい。

今回たくさんの人の思いや生活を聴き、個人の努力だけでは解決できない大きな社会の流れの中に身を置いているとあらためて感じた。

長時間労働の夫と家庭責任を一手に背負う妻。どちらも生活のバランスはいいとは言えない。夫婦で共に歩むと決めたなら、お互いを大切にもっとゆっくり進む生活があってもいい。社会のさまざまな価値観が揺らぐ今、女性の生き方でいえば、「専業主婦」か「キャリアで自立」かの二者択一では立ち行かないことはもはや明らかである。「専業主婦」の中でも世代や経歴や家族状況で価値観はさまざまに違う。個人のなかでも仕事に積極的に取り組みたい時期があれば、家族との生活を大切にしたい時期もある。両方を適度に両立したい時期もまたある。人生のそれぞれの箇所仕事、家庭、地域活動にかける重みは女性も男性も一人ひと

り当然違う。このそれぞれの生活設計に適った働き方を認め合い、方向転換の必要に気づいたときにいつでも「やり直し」のできる支援があればいい。

「私」の問題から出発し、グループ活動を通して話し合い、さらにさまざまな人たちの協力と支援でいくつもの日々の思いを集めた。今を生きる女性も男性も一人ひとりが生活も経済活動も、地域での活動も大切にできるようにとの思いを込めてむすびとしたい。

〈注〉

- 1) このインタビューは筆者の所属する自主グループ「ぶらすⅠ」メンバーの椎野和枝(インタビューも)、岡部フミ、津田加代、西池美智子との協働で行った。
- 2) 「わくわくプラザ」：放課後および学校の休日に小学校の施設を利用して展開する事業。留守家庭事業(学童)との統合を図り、2003年から川崎市内すべての市立小学校で開設。小学1～6年生対象。無料。

〈引用文献〉

- 入口茂 2003 「終の棲家の居住選択と地域活動」 川崎市総合企画局政策部編『政策情報かわさき第15号』
- 川崎市 2002 『かわさき健康ニューファミリー育成健康資源開発モデル事業 H12・13年度実施報告書』
- 川崎市男女共同参画センター 2003 『川崎市生活時間実態調査報告書』
- 川崎市ホームページ <http://www.city.kawasaki.jp>

(つだ・よしこ 自主グループ「ぶらすⅠ」代表)